



野外民族博物館リトルワールドにおける「民族」概念についての 初歩的レポート

フレデリック・ルシーニュ (COE 研究員・RA) Frédéric LESIGNE

1983年3月に開館したリトルワールドは、愛知県犬山市と岐阜県可児市にまたがる愛岐丘陵の中に位置する私立野外民族博物館である。近在の博物館明治村、日本モンキーパークと併せて、文化的な観光事業として名古屋鉄道株式会社（以下名鉄と略記）によって設立された。2003年10月から名鉄の子会社・名鉄インプレスの運営となり、現在、完全にテーマパークに変化してきている。⁽¹⁾名鉄グループの累積赤字削減のために、閉園が検討され、一時、閉鎖の可能性も検討されたが、文化人類学関係者の協力も得ながら新たな方向性を探っている。これまで集客のために行ってきたサーカス等のイベントに代わって、世界の料理や民族衣装の試着などの、愛・地球博で好評だった分野にも力を入れ始めている。

博物館の施設は本館展示場と野外展示場の2部構成からなり、敷地面積は123万平方メートルに及ぶ。本館展示場は世界70カ国から集めた約6000点の民族資料を展示し、進化、技術、言語、社会と価値という5室に分かれ、テーマごとに民族の文化の多様性や共通性を紹介している。一方、野外展示場は1周2.5キロの周遊路に沿って、ヨーロッパ、アフリカ、アジアなど22カ国33の家屋を移築・復元している。また、各国の家屋では、民族衣装の試着体験や、その国ならではの料理やショッピングを楽しめるような施設が充実している。

本館に収められている世界各地からの6000点の民族資料と野外の33展示家屋は非常に貴重なものである。例えばネパール仏教寺院の再現は2年もかかったようであるが、リトルワールドの研究者は現地のシェルパ族の村で正確な実測を行ったうえで、地元の絵師を日本に招き、手描きによって仏画を再現させた。

1974年の創設以降、財団法人リトルワールドは海外の現地調査を活発に援助した。⁽²⁾1983年に世界で初めて野外民族博物館として開館した時、「人間博物館リトルワールド」と呼ばれ、レベルの高い研究拠点でもあった。モンキーセンター開発当時から濫澤敬三と親しかった土川元夫（名鉄元会長、1974年死去）がこの計画の陣頭指揮をとった。「明治村」という建築博物館がすでにあっただけで、それを世界規模にひろげた形で、万国博に建つ世界各国の建物を、将来一か所に移築したいという構想は1967年頃からあった。しかし、1970年に開催された万国博会場には、予想に反して近代的なビルディングのみが建っていたので、名鉄の経済力を背景に、今度民族的色彩のある民族学博物館という施設の計画の検

討をはじめた。その際、民族学者の泉靖一（東京大学教授、アンデス研究、1970年死去）にリトルワールド設立計画への協力をあおいでいる。当時すでに、大阪の国立民族学博物館設立の計画も平行して進められており、泉はその推進役であったが、開館の目的はまだ立っていなかった。「そこで、国立と名鉄と、二本レールで走ろうということになった」と、モンキーセンターの評議員で、後に国立民族学博物館初代館長に就任した梅棹忠夫は回想している。⁽³⁾

COEプログラムのRAとして最終成果論文集に掲載する予定の私の論文は、リトルワールドの事例と関連して、「民族」概念をテーマにした研究である。

リトルワールド博物館の開館は1983年3月であるが、計画の検討開始は1967年に遡り、その設立工事は1970年代に行われた。1960～70年代の日本の人文科学の分野において「民族」概念は、根本的なタームとしてさまざまな理論を支えるために頻りに使われていた。とりわけ戦後20年間、多数の日本人論が出版されたが、それらの自画像としての日本人論には、「日本人」について語るときに同義語として「日本民族」という表現が登場して、日本民族を世界の他の民族と対比するスタンスが主張されている。日本人論に関する先行研究によると、このような刊行物が広く読まれた理由は、小熊英二が論証したように、終戦にともなって日本人の文明論の関心が日本列島に戻った、という社会のニーズの変化とともに、明治時代から進められてきた日本の文化人類学のさまざまな研究の成果が戦後にまとめられて、それが日本人論の形成にも取り入れられるようになったという現象も挙げられよう。

リトルワールドの場合は、もちろん社会のニーズに敏感な名鉄の動きによるところが大きいと思われるが、それと平行して、この博物館設立に協力した研究者たちは戦前から活動してきた一流の文化人類学・考古学の専門家であり、彼らは戦前から行われてきた民族学・文化人類学の研究を1950年以降、リトルワールドや大阪の国立民族学博物館へ持ち込むようになった。結果的に、「民族」概念も自然にリトルワールド計画に導入され、暗黙の了解の上でリトルワールド計画構想の時点から「民族」概念が重要な役割をはたした。

リトルワールドと関連して、フランス語と比較して日本語の「民族」概念の特徴を一つ述べておきたい。「民族」概念はフランス語のエトニ (ethnie) または英語のエスニック・グループ (ethnic group) と比べると、対象の範疇が広い。特

に注目すべきものは、例えばフランス語では「エトニ」という概念がそもそも民族学の学術的なタームであるから、そのタームを西洋人に対して使用しない傾向がある。西洋人のためには、^{ポープル}peopleや^{ナシオン}nationをより好んで使用する（英語も同様）。それが差別にあたるかどうかはここで議論を省くが、ともかく、「エトニ」は植民地時代から明らかに人類の一部分しか指さない意味範疇をもっている。⁽⁵⁾

それに比べて、日本語の「民族」概念の方は、紛れもなく、日本人はもちろんのこと、人類のすべての集団を指す。戦前には「部族」という表現もあったが、戦後になってあまり使用されなくなり、人類の多様性を論じる場合は、主に「民族」概念を用いるようになった。その事情はリトルワールドと深い関係があると思われる。理論上、人類がいくつかの「民族」という集団に分類されているという認識が存在して初めて、リトルワールドという空間の中で世界中の「民族」を「民族学」の視座で平等に展示する構想が可能になる。さらに言うと、梅棹忠夫の希望を裏切って、リトルワールドのような、全世界の民族を対象にした野外民族学博物館は世界的に日本にしか設立されていないという事実も日本語の「民族」概念の特殊性を示唆的に語っていると思われる。⁽⁶⁾

リトルワールドの例を取り上げた理由は、あくまでもこの研究を「民族」概念の歴史的な検討の一環として考えているため、この施設を批判、あるいは賛美するためではない。西欧ではヒストログラフィー（学問の歴史、研究史）の観点で、学術的な見解を分析し、暗黙の了解で使われがちな概念を問うことが基本的な作業であると考えられている。日本でも同じような作業が大変重視されているので、ここで欧米と日本とを対比させるつもりはない。ただ、「民族」概念に対して特別な思いを抱く外国人として常に思うのは、この概念を相対化して、明治時代から現在まで日本の学問の背景においてその位置づけを明らかにすることができたならば、どれほど日本の人文科学に資するだろうか、ということである。

したがって、この研究の目的はリトルワールドにおける「民族」概念を相対化して、その概念の役割を明らかにしようとするものである。それにあたって、リトルワールドの刊行物の検討と現地の見学を計画している。また、リトルワールドは第二次世界大戦の時代を生きた一流の研究者や実業家が構想し、設立した博物館であるため、「民族」概念と関係している限り、彼らの戦前・戦中の活動や書物にも注意を払うつもりである。

（なお、文中の敬称は省略させていただいた。）



リトルワールド刊行の冊子表紙より
野外展示場に1986年4月にオープンした「フランス・アルザス地方の家」で、翌年の7月から「民族衣装」を着て伝統文化を紹介していたアルザス地方出身の女性たち。

- (1) 名鉄のホームページより。
- (2) 『Little World News』1号、1975年7月。
- (3) 大貫良夫・梅棹忠夫、「野外博物館のビジョン」『月刊みんぱく』、1978年10月号。
- (4) 小熊英二、『<日本人>の境界：沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮植民地支配から復帰運動まで』、新曜社、1998年。
- (5) 拙稿、「フランス民俗学辞典の『民族』項目の翻訳」、『比較民俗研究』17号、2000年3月、p175-178。
- (6) 日本やアジアにおいては、海外の文化を紹介するテーマパークや外国村が多い。またその国の民俗を扱う「民族博物館」が多く設立されている（Joy Hendry, *The Orient Strikes Back: A Global View of Cultural Display*, Berg, 2000に参照）ただし、リトルワールドのように同じ施設の中で、網羅的に自分の文化と他者の文化を民族学の視点で扱う野外博物館は日本以外に類が無いようである。